

達古武地域における森林再生 ベースマップの作成と保全・再生優先度の検討 (5/10)  
4. 再生の目標となる森林の検討 過去の植生図と目標林の抽出

伐採・植林前の林相 - 潜在的な植生

文献における過去の記述

別保川流域...ミズナラ・エゾマツ・トドマツ  
岩保木・前田牧場周辺...ミズナラ・ヤチダモ・ハリギリ・ドロノキ・カツラ等  
標茶町段丘地域...北方系と温帯性落葉広葉樹林が混生。針葉樹林の空白地帯。  
塘路原野...湿地はハンノキ、丘陵地はカンバ・ミズナラ・イタヤカエデ・ハリギリ等

地形図から復元した植生図

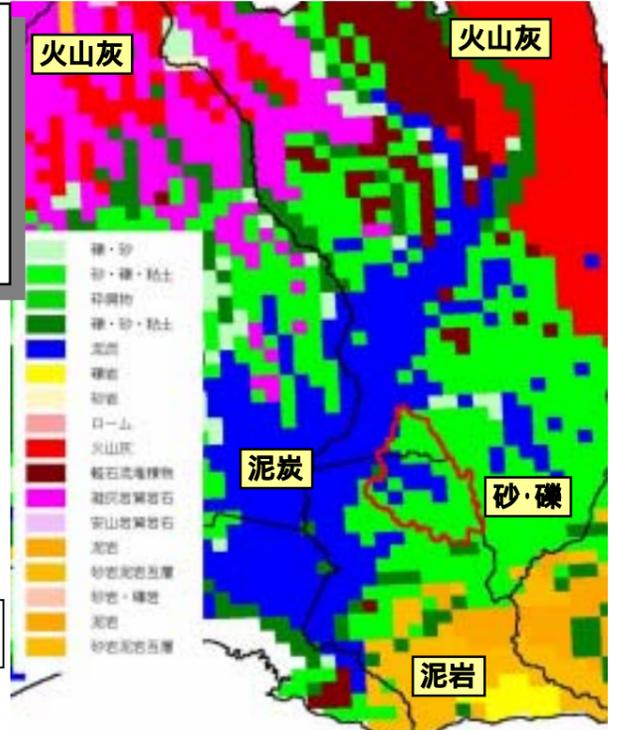
1920年の地形図をもとに植生・土地利用を再現。達古武周辺は広葉樹林。上別保周辺から南・東に針広混交林が見られる。



広葉樹  
針葉樹  
湿原  
赤枠が達古武地域

表層地質図

標茶町市街地周辺から阿寒にかけては広く火山灰が堆積。達古武周辺は堆積物となっているが、やや古い時代の火山灰土と思われる。別保から上尾幌にかけての海岸沿いは、泥岩が主で異なる地質。



赤枠が達古武地域

釧路湿原東部の丘陵地域における森林伐採の歴史

明治10-20年代(1890年前後)  
釧路川や阿寒川下流を中心に造材が本格化する。  
明治30年代(1900年前後)  
釧路川東岸では別保官林を中心に林業開発が進む。  
1900年前田栄次郎が牧場を開き、立木を伐採。  
釧路にパルプ工場・製材工場ができ、パルプ原木として針葉樹、枕木・角材としてミズナラ・ヤチダモが伐採された。海外にも輸出。  
大正～昭和初期(1910-1930年頃)  
国有林から民有林が多くなり、製炭業利用が増加。  
戦時中(1935-1945年頃)  
軍の陣地用材として大量に乱伐。森林組合設立。  
戦後昭和30年代後半(1960年頃以降)  
カラマツ植林地の拡大。

まとめ

・達古武沼周辺は本来はミズナラを主とする火山灰土上の広葉樹林。分水嶺から南で針広混交林が見られる。  
・約100年前及び60年前に大規模に伐採され、原生的な森林は失われた。現在あるのは、その後さらに1～数回の伐採を受けたのちに成立した二次林と、造林された人工林でほとんど占められている。

参考文献

寺島敏治(1988)釧路の産業史,釧路叢書26 田中瑞穂(1963)釧路の植物  
北海道出版企画センター(1986)北海道殖民地撰定報文(復刻版) 釧路町史 標茶町史  
トラスサルン釧路(1995)達古武沼生態調査報告書  
伊藤浩司(編),1987,北海道の植生,378pp,北海道大学図書刊行会

目標とする森林の姿

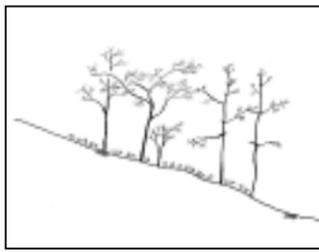
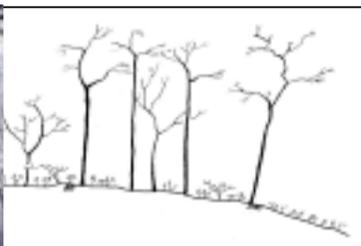
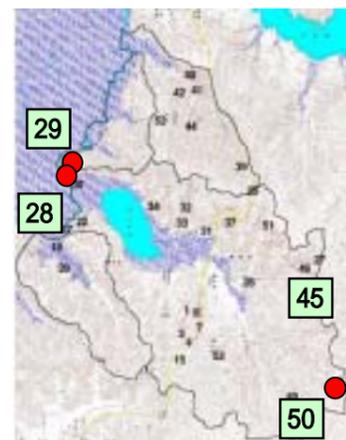
以上の資料と現地踏査を合わせると、再生の目標となる森林は大きく以下の二つに分かれる。それぞれ現状では十分に発達した森林はないが、現地調査の結果から近い姿のものを示した。

丘陵地 ミズナラを主とする落葉広葉樹林

例. 調査地29  
主要構成種 ミズナラ・イタヤカエデ・ハリギリ・シラカバなど  
風衝地などではダケカンバなどが多くあると思われる。一方、南東部では、広葉樹の種類が多くなり、局所的にトドマツも混じる(調査地45.50)。

沢地形などの湿った堆積地 ハルニレを主とする湿性の落葉広葉樹林

例. 調査地28  
主要構成種 ハルニレ・ヤチダモなど



29. 優占種 ミズナラ (イタヤカエデ、ヤチダモ、ハリギリ)  
平均直径 15cm  
平均林冠高 12m  
立木密度 3/100m<sup>2</sup>

28. 優占種 ヤチダモ・ハルニレ (シラカバ、ハンノキ)  
平均直径 30cm  
平均林冠高 22m  
立木密度 2/100m<sup>2</sup>

50. 優占種 ミズナラ・トドマツ・アズキナシ・ナナカマド  
平均直径 25cm 最大個体の直径60cm  
平均林冠高 16m  
立木密度 7/100m<sup>2</sup>